

A close-up, low-angle shot of a piano keyboard. The keys are white and black, receding into the distance. A semi-transparent green horizontal band is overlaid across the top half of the image, containing the title text. The lighting is soft, highlighting the texture of the keys and the wood of the piano's body.

別れのピアノ

雨音 多一

少しずつ夕闇が迫ってきた。一日の終わり、その時間は成熟した果実のように甘く匂った。一日の終わりに訪れる夕景。それはまるで絵画のようである。黄や赤の色が、大空と大地を染める。

秋の夕景の中に、人生の秋を迎えるには少し早い青年が、紅葉のはじまった山道を歩いていた。

「どうも、こんばんは」

ひなびた旅館「秋島」に戻る道すがら、僕は初老の男性と言葉を交わした。僕は米山尚次、デザイナーである。十一月の休みに、妻とふたりで旅に出たのだ。

一泊の旅は、山河温泉に決めた。夕食が楽しみである。妻の未来（みく）は二度目の露天風呂につかっている。僕は湯上りの肌を涼ませに旅館の裏の山道に来たのだった。

「秋島旅館にお泊りの方ですか」

「ええ」

「紅葉の季節が、一番いいですなあ。この山道が美術館になる」

「全く」

僕は、初老の男性と連れだって旅館へと戻りはじめた。

「この山の頂きに、『幸福の鐘』があるそうですよ。もう行きましたか」

「いえ、まだです」僕は頭を振った。

「鐘を鳴らした者が、幸福になれるそうですな」

「そうなんですか」

「私もその恩恵を受けて参りました」

僕らはそんな会話を交わしているうちに、旅館のラウンジへと到着した。旅館は、昭和初期の趣きを残した古風なつくりで、所々洋風のテイストを取り入れていた。

「では、これにて」初老の男性はそう言い残して、自室へと帰っていった。

夕食はなかなか豪勢だった。未来と共に食事を済ませた僕は、ひとりでラウンジ近くの土産物屋へと向かった。

「さて、どれにするかな」

僕があれこれ品定めしていると、先ほどの老人が入ってきた。

「やあ、また会いましたな」

「お土産ですか？」

「そうなんです。年末に孫娘が遊びに来るもので」

「それは楽しみですね」

「来春、東京の大学を卒業して、実家へ戻ってくるんです」老人はそう言うと、面相を崩した。

「僕たち夫婦の間には、子どもがまだなんです。きっと子よりも孫は可愛いのでしょうか」

「それは、もう」

「子どもが出来たら、仕事どころではなくなってしまうのかと、少し心配しているのです」

僕はそういうと苦笑いをした。

「失礼ですが、どんなお仕事を？」

「グラフィック・デザイナーを。妻はイラストを描いています」

「そうでしたか」

老人が思いつめたように、僕の顔をうかがった。

「実は、……その」

老人は口ごもりながら言葉を続ける。

「孫の、卒業記念コンサートの、印刷物を作っては、いただけないでしょうか」

「印刷物？ まあ、そちらに掛けてお話ししましょう」

僕はそう言うと、ラウンジの木の椅子を指さした。

「ありがとう」

「コーヒーでいいですか？」

僕はボーイを呼ぶと、コーヒーを二つ頼んだ。

「どんな印刷物なんですか？」

「コンサートの演目、曲目リストです」

「コンサート？」

「はい。孫娘は音大でピアノをしていて、その卒業コンサートを、来春にするのですよ」

「そういう事ですか」

僕は財布の中から、少し折れた名刺を一枚取り出して、老人に渡した。
「改めまして。デザイナーの米山尚次です」
「玉川と申します。玉川直人」
「どうかよろしく」
「こちらこそ」
「卒業コンサートは記念になりそうですね」
「はい。もう、これでピアノを辞めるんだと言っておりました」
「それは、もったいない」
「どうしてもピアノだけでは生活できないんだとか。別れのピアノにしたいんだ、と」

僕はうつむく玉川さんを見ていた。

玉川さんから、ピアノコンサートの原稿が届いたのは、年の瀬のことだった。

「拝啓 米山様。丸中市は雪の便りも少しずつ届いて参りました。今日同封したのは、卒業コンサートの曲目リストです。これを格好良く仕上げてくださいか。もう一つは、孫娘の写真です。これをデッサンのような絵で描いて貰えますでしょうか。宜しくお願いします。敬具」

「未来、ちょっと来てくれる？」

僕は妻を呼ぶと、写真を手渡した。

「この写真から、デッサンタッチのイラストをおこして欲しいんだ」

「あら、素敵な写真ね」

「大丈夫？」

「モチロン」

未来は頷くと、左手に持っていた葉書を見せた。

「今度、ギャラリーで展示があるの。行ってみない？」

「どれどれ」

展示は日用品の焼き物である。「大山焼」という窯で焼かれたもので、陶工の名は、林川早太といった。

「割といいね。これ幾ら位するのかな」

「ホームページにでてるかしら」

「でて無かったら、現物を見てのお楽しみだね」

「それもそうね」

僕らは年末に迫った陶芸家の個展を、見に行くことを決めた。

次の日曜日のことだった。僕ら夫婦は、行きつけの『ギャラリー瞳』へと向かった。

「ギャラリー瞳」は、僕ら夫婦の住む山河市のはずれにある。オーナーの江戸川明氏とは十年来の仲だ。二年前のギャラリー建築の際に、微力ながら手助けをした経緯もあり、仲良くさせてもらっている。

「こんにちは」

「ああ、どうも。遂に降りましたね」

「ホワイトクリスマスだね」

「全く」

ギャラリーのオーナーの江戸川明さんは、雪の粉を上着からはたく僕らを温かく迎え入れてくれた。

「今日を楽しみにしておりましたの」

江戸川ひさきちゃんだ。僕は、時々ひさきちゃんの若いエネルギーに気おされる時すらある。

「こんにちは。ひさきちゃん」未来が声を掛けた。

「未来さん、もう雪まみれね」

僕が笑うと、笑いごとじゃないわよ、と未来が少しむくれた。

「年賀状は、もう書きましたか」

ひさきちゃんが僕に尋ねた。

「昨日、ようやく書き上げたよ」

「私のイラストを使ったの」と未来。

「私、全部手で書いたんです」

ひさきちゃんが柔らかに告げた。

「凄いね。僕は全部パソコンだよ」

「素敵だわ」未来が頷いた。

江戸川明さんがゆっくりと口を開いた。

「手がきなんて、大変なだけだ、と何度言ってもきかないのです」

ひさきちゃんが苦笑いをする。

「いいの、お爺様。枚数も少ないし」

そんな会話を交わしながら、僕らはギャラリーの奥へと入っていった。

「これが今日の展示のメインか」

僕ら夫婦を出迎えたのは、大皿の焼き物だった。

「いい景色ね」

未来が大皿に見とれながら呟いた。

「結構値が張るな」

「そうね」

僕らは三十分程かけて、展示を満喫した。その後、江戸川さん達とテーブルを囲んで、コーヒーを楽しんだ。

「それじゃ、また」

「有難うございました」

未来は、陶製のスプーンを二本買った。僕らはほくほくして、暖かいギャラリーを後にした。

「雪ね」

未来が空を見上げた。

「この雪が雨になる頃に、玉川さんのお孫さんは、ピアノを卒業するんだな」

「少し淋しいわね」

「ああ」

僕らは積もりはじめた雪を、踏みしめながら歩き出した。

人生に迷いや間違いがあるように、デザインにも迷いや間違いはある。それを正すのが「校正」という作業だ。自分で見ただけでは分からないかった誤字脱字や、日付の間違い。それを別の人がチェックすることで間違いを減らすのだ。

玉川さんからのデザインの依頼も、校正の段階を迎えていた。僕は初校と呼ばれる最初の校正用紙を封書で送った。メールで済ます場合もあるが、モニタ画面によって見える色が異なる場合も多いので、僕はよく校正用紙を郵送している。

その玉川さんからの返事が来たのは、一月中旬のことだった。

「デザイン、どうなったの？」

未来が封筒を見ながら尋ねた。

「こんな感じかな」

僕は玉川さんからの封筒を開いて見せた。

「ふうん、なかなかね」と未来。

「でしょ」と僕。

未来がこのデザインを見るのは初めてである。別案のデザインの時に、文章の校正を未来に頼んだから、それは見ていたのだ。

「拝啓 米山様

この度は、素晴らしいデザインを作って頂き、ありがとうございます。孫娘もいたく気に入った様子でした。大筋はこのデザインをお願いします。

それから当日のチケットを二枚同封しました。宜しければ、奥様と二人で当日おいで下さい。それでは、また。敬具」

「やったな、未来。チケットだって」

「コンサートなんて何年ぶりかしら」

「クラシックやピアノのコンサートは初めてだな」

「楽しみね」

僕らは微笑みを交わすと、手のひらの小さなチケットを見つめた。

今年の雪は例年より少ないためか、雪融けも早かった。三月下旬の雪はほとんど無くなり、春らしい天気が続いていた。

僕ら夫婦は、コンサート会場に入っていった。会場は玉川さんの地元の丸中市で、比較的大きな文化ホールだった。

「見て、あの印刷物」

未来が会場の一角を指さした。

そこには、僕らの創ったパンフレットが重ねられていた。入口で貰っただけでなく、こんなところにも置いてあるなんて。

開演するまでの間、会場の人々が僕らの創ったパンフレットを、おもいおもいに眺めている。その光景に、僕は胸が熱くなった。こみ上げてくるものを感じながら、僕は涙をこらえていた。隣で未来が心配そうに僕を見ている。

「もうすぐ、始まるわよ」

「ああ」

開演のアナウンスが響いた。しばらくして演奏がはじまった。

圧巻のピアノだった。前の席のためか、音が腹に響いた。テクニック云々よりも、ピアノの感情表現の力が全身を揺さぶった。音は耳で聴くのではなく、全身で聴くものだという事が初めて分かった。

演奏は三十五分ほど続いた。玉川さんの孫娘が、最後に立ち上がって挨拶をした。

「今日まで、私は十数年間ピアノを続けてまいりました。でもこれでピアノとはお別れです。今で応援してくれた皆さん、本当にありがとうございました」

幕が下りた。

「あなた、控室にいつてみない？」

未来が誘いの言葉を掛けてくれた。

「そうだね」

僕らは、控室にいる玉川さんの孫娘のもとへと向かった。

控室に入ると、玉川さんが居て、僕らを迎えてくれた。控室には、親子連れがいて、玉川の孫娘と話をしていた。

「あの、娘のピアノの先生になってくれないでしょうか」

「でも、私はもう……」

「あなたのような人に、先生になって貰いたいんです」

「ピアノを辞めないで……」未来が思わず口を挟んだ。

「私に出来るかしら……」

「大丈夫、みんなで応援するよ」

玉川さんの言葉は力強かった。

ピアノの先生の依頼はその親子だけではなく、他に二組あったという。

僕と未来は、家に帰り着くと、お紅茶を飲みながら話をした。

「本当の音とは何か」、「本当の美とは何か」……。答えは出なかった。

ただ、「ピアノ曲はが体を震わす音である」という点だけは一致した。

後日玉川さんの孫娘さんから、お礼状が届いた。結局、土日の休みを利用して、ピアノの先生になったそうである。「ピアノを辞めなくて、本当に良かった」という言葉が胸にしみた。そして「別れは、アマチュアの私との訣別だったのです」という一文に全てが込められていた。

春はもうそこまで、やって来ていたのである。

別れのピアノ

<http://p.booklog.jp/book/130341>

発行日：2020年3月22日

初出：「たかはた文学」第45号（2019）

著者：雨音多一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/taichi-amane/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/130341>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社